



地下にあるもうひとつのスイス : デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象

増本, 浩子

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 50:1*-21*

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481148>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481148>



地下にあるもうひとつのスイス

——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

増 本 浩 子

1. 序論：ドイツ語文学におけるアルプスの表象

周知のように風景は「発見」されるものである。長らく交通を妨げる障害物とみなされ、異界として恐怖の対象でもあったアルプスは、18世紀には美しく崇高なものととらえられるようになった。アルプスに崇高な美を見出すという感性の発達に決定的な影響を与えたのが、ベルン出身の詩人ハラー（Albrecht von Haller, 1708-1777）の長編詩『アルプス』（*Die Alpen*, 1729）と、ジュネーヴ出身の哲学者ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の小説『新エロイズ』（*Julie ou la Nouvelle Héloïse*, 1761）だったことはよく知られている。¹ この時期、観光も急速に発展し、特にイギリスで貴族の子弟が教育の仕上げにイタリアを最終目的地として大陸を旅行するグランド・ツアーが流行して、アルプスを体験するイギリス人が急増する。² このスイス旅行熱はヨーロッパ中に広まり、それまで回避されてきた山岳地帯が、崇高な美を求めてわざわざ出かけて行く、人気の観光地となった。アルプス体験は紀行文その他、

* 本稿は科学研究費補助金基盤研究（B）「〈アルプス神話〉の形成と脱構築——スイスの国民統合における文化的表象のポリテクス」（研究代表者：葉柳和則）の助成を受けて執筆された。

1 森本慶太「スイス・アルプスへの旅——アルピニズム・鉄道・観光業」踊共二編『アルプス文化史——越境・交流・生成』昭和堂、2015年、71-72頁参照。

2 イギリス人によるアルプス景観の発見に関して、詳しくはM. H. ニコルソン『暗い山と栄光の山』小黒和子訳、国書刊行会、1989年を参照。

さまざまな文学作品を生み出していく。

チューリヒ出身の自然科学者ショイヒツァー（Johann Jakob Scheuchzer, 1672-1733）は、アルプスの自然条件がそこに住む人々の性格に影響を与える
と主張した。ハラーもこの考え方を受け継いで『アルプス』でアルプス住民
の素朴さ、実直さを褒め称えた。³ 山岳で暮らすスイス人のイメージを決定的
にしたのは、スイス建国神話に取材したシラー（Friedrich von Schiller, 1759-
1805）の戯曲『ヴィルヘルム・テル』（*Wilhelm Tell*, 1804）だった。（ちなみに、
シラー自身は一度もスイスを訪れたことがない。）スイス建国は1291年、それ
ぞれ主権を持った3つの原初カントン（州）の住民が、この地域で支配力を強
めてきたハプスブルク家に対抗して、自分たちの自由と独立を守るために相互
扶助の同盟を結び、盟約者団（Eidgenossenschaft）を結成したことにさかのぼ
る。伝説によるとその際、素朴な農民でありながら弓の名人でもあったヴィル
ヘルム・テルの働きによって、原初3州はハプスブルクという強大な敵を追い
払うことに成功した。

シラーがこの戯曲を執筆したのは、1798年に盟約者団がナポレオン軍との
戦いに敗れ、フランスの干渉と指導のもとにヘルヴェティア共和国という中央
集権的な国家が成立したからだった。これはヨーロッパの人々に、自分たちが
こよなく愛するあの美しいアルプスの国スイスの自由がこの世から消えてし
まったと思わせる出来事だった。シラーは当時のスイス・ブームをうまく利用
して、他国による圧政に対抗して自国の自由と独立を守ったテルの伝説にアク
チュアルな時事問題を重ね合わせたのである。大成功を収めたこの戯曲はその
後、アルプス（とりわけ盟約者団結成の際に同盟の誓いを立てた場所とされる
リュトリ）がスイス人のナショナル・アイデンティティを支える建国の物語と
深く結びついた国民的な「記憶の場（lieu de mémoire / Erinnerungsort）」と
なり、自分たちは武器を持った農民テルの末裔であるというスイス人の自意識

3 穂山洋子「ヨーロッパ世界のナショナリズムとアルプスの多民族国家」踊共二編、
前掲書、193頁参照。

の形成に大きな役割を果たすことになる。フランス革命期には自由の闘士で革命の先駆者としてイメージされることもあったテルが、シラーの戯曲では自分たちと同じような庶民で、実直な山の住民として描かれていることをスイス人は歓迎した。⁴

この戯曲ではアルプスは、侵略者から自由と独立を守るための戦いの場だが、アルプスを舞台にしたもうひとつの有名な物語、チューリヒ出身の女流作家シュピーリ (Johanna Spyri, 1827-1901) の『ハイジ』においては、⁵ アルプスは人々を健康にする場所であり、⁶ 「敬虔な、徳のある、自足した、調和的な農民」⁷を生み出す場所でもある。新本はこの作品によって「〈美しいアルプス〉イメージに〈故郷としてのアルプス〉イメージがさらに書き加えられた」⁸と指摘している。

20世紀になり、2度の世界大戦の後、スイスは小国でありながらも中立を守り抜き、亡命者を受け入れた平和と人道主義の国として讃えられ、アルプスの景観のみならず国家としての実態も美しい国とみなされるようになった。だが、実際にはスイスも少なからず手を汚しており、⁹ 美化されたスイス・イ

4 Vgl. François de Capitani: *Wilhelm Tell*. In: *Historisches Lexikon der Schweiz*. Online Ausgabe, 2013, <http://www.hls-dhs-dss.ch/textes/d/D17475.php> (Stand: 15. 9. 2022)

5 原作は『ハイジの修業時代と遍歴時代』(*Heidi's Lehr- und Wanderjahre*, 1880) と『ハイジは習ったことを役立てる』(*Heidi kann brauchen, was es gelernt hat*, 1881) の2作品であり、キリスト教精神に基づく教養小説という体裁をとっている。

6 アルプスの村では貧しくても幸せで健康だったハイジは、ドイツの都会の裕福な家庭ではホームシックのあまり夢遊病になり、フランクフルトで足が不自由だったクララは、アルプスの大自然の中で癒され、歩けるようになる。

7 穂山洋子、前掲論文、195頁。

8 新本史斉「〈故郷としてのアルプス〉を掘り崩す I——ヘルマン・ブルガーの『人為の母』序論」『津田塾大学紀要』第54号、2022年、205頁。ハイジがかかったホームシックは、もともと「故郷を離れて遠いヨーロッパ諸国の宮廷で『傭兵』として勤務するスイス兵特有の病として広く認知」されていた(同上)。

9 1996年に、ホロコーストの犠牲となったユダヤ人の休眠口座がスイスの銀行に多数残されていることが暴露され、国際的なスキャンダルになった。これを機に、当時のスイス政府は「独立専門家委員会スイス＝第二次大戦(Die unabhängige Expertenkommission Schweiz - Zweiter Weltkrieg)」を立ち上げて1996年末から2001年にかけて徹底的な調査を行い、その結果は25巻からなる報告書にまとめられた。詳しくは黒澤隆文編『中立国スイスとナチズム——第二次大戦と歴史認識』京都大学学

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

メージに異議を申し立てるスイス人作家が登場し始める。たとえば、ビクセル（Peter Bichsel, 1935年生まれ）は1967年に発表したエッセイで、皮肉を込めて次のように述べている。

第二次世界大戦中、スイスはパラダイスだった。「スイス」は迫害された人々にとっては魔法の言葉であり、約束の地だった。苦しむ人々の目にスイスの風景は天国のように見えただろう。スイスという国家とスイスの風景は、彼らには渾然一体となっていた。そして自分たちの国家と風景が一体化していることを、私たちスイス人自身も確信しているのである。¹⁰

シラーの『ヴィルヘルム・テル』が成立して以来、スイスの作家は誰もテルを題材にした作品を書こうとしなかったが、フリッシュ（Max Frisch, 1911-1991）がそのタブーを破って『学校のためのヴィルヘルム・テル』（*Wilhelm Tell für die Schule*, 1971）を執筆する。¹¹ フリッシュはシラーの戯曲のプロットをなぞりながら、それを異化する注釈を加えるという手法でその脱神話化を図った。¹² 同様に、ビクセルもシラーのテル像に同一化するスイス人の態度には批判的な態度をとっている。

祖国に関する事柄で私たちがよく勘違いをするのはもしかしたら、祖国に関することを私たちの話し言葉（Mundart）ではなく、シラーの言葉——私た

術出版会、2010年を参照。

10 Peter Bichsel: *Des Schweizers Schweiz*. In: ders.: *Des Schweizers Schweiz*. Frankfurt/M: Suhrkamp, 1997, S. 12f.

11 「学校のための」とわざわざ断っているのは、戦後、1969年までチューリヒ劇場で学校向けにシラーの『ヴィルヘルム・テル』を上演することが義務づけられていたからである。中村靖子「テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像」葉柳和則編『チューリヒ劇場と文化の政治』（日本独文学会研究叢書117号）、2016年、75頁参照。シラーのこの戯曲は第二次世界大戦中には、ナチス・ドイツに抵抗するスイスを表す寓意劇としてさかんに上演された。

12 同上、77頁参照。

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

ちはそれを書き言葉 (Schriftdeutsch) と名付けているのだが——で表現する習慣があるからかもしれない。私たちの英雄が語る偉大な言葉を話し言葉を翻訳すれば、その嘘が明らかになる。¹³

シラーの戯曲はスイス人にとっては、外から押し付けられた自己イメージであり、スイス人は借り物の言葉で自国について語っている、とビクセルは主張しているのである。

デュレンマット (Friedrich Dürrenmatt, 1921-1990) は美化されたスイス・イメージとしてのアルプス神話に抵抗する。たとえば、劇作家としてのデビュー作『聖書に曰く』 (*Es steht geschrieben*, 1947) では、16世紀にドイツ北西部の都市ミュンスターに出現した再洗礼派王国を題材にして、第三帝国を彷彿とさせるような集団の狂気を描きつつ、その舞台をミュンスターからアルプスに移すことによって、スイスをナチス・ドイツに重ね合わせた。¹⁴

ドイツ語文学におけるアルプスの表象というテーマにとって最も興味深いデュレンマット作品は、『チベットの冬戦争』 (*Der Winterkrieg in Tibet*, 1981) だろう。第二次世界大戦中に構想され、1970年代に完成されたこのディストピア小説では、語り手の「私」は、第三次世界大戦で世界の大部分が壊滅した後、チベットの山奥で続けられている戦闘にスイス人傭兵として参加して

¹³ Peter Bichsel: *Des Schweizerers Schweiz*. In: ders.: a. a. O., S. 18. スイス・ドイツ語 (話し言葉) と標準ドイツ語 (書き言葉) との違いは非常に大きい。

¹⁴ ヒトラーと二重写しになっている再洗礼派の王が、その餌食になるミュンスター市長に対して次のように呼びかけるシーンがある。「おまえの谷にいる石の山羊たちがメーメーと鳴くのが聞こえる。おまえのアルプスにいる牛がモーモーと鳴くのが聞こえる！ 私は腹をゆすり、尻を振り、腕をぶらぶらさせるのだ。」Friedrich Dürrenmatt: *Es steht geschrieben. Ein Drama*. In: ders.: *Werkausgabe in 37 Bänden*. Zürich: Diogenes, 1998, Bd. 1, S. 138. (以下この全集はWerkausgabeと略記し、巻数と頁数のみで引用個所を示す。) 翻訳は山本佳樹による。デュレンマット『聖書に曰く』山本佳樹訳、『デュレンマット戯曲集』第1巻、鳥影社、2012年、140頁。この作品の詳しい分析は拙論「〈偶像〉の行く末——『聖書に曰く』の生成と受容」葉柳和則編『ナチスと闘った劇場——精神的国土防衛とチューリヒ劇場の〈伝説〉』、春風社、2021年、360-367頁を参照されたい。

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

いる。ヒマラヤに掘られた迷路のような地下道の中で行われている戦闘は、「味方と敵が同じ白い制服を着ているため」¹⁵に困難を極めている。兵士たちが敵はいったい誰なのか、敵はそもそも存在するのかと問うことはタブーとされ、違反した者は厳しく処分される。

物語はヒマラヤでの戦闘という設定になっているが、構想当初イメージされていたのはおそらくアルプスでの戦闘だろう。1940年6月14日にパリが陥落し、スイスが四方を敵国に囲まれてしまうと、当時スイス軍の最高司令官だったアンリ・ギザン将軍（Henri Guisan, 1874-1960）は、7月25日に軍の幹部を建国の地リュトリに召集し、ナチスへの徹底抗戦を訴えた。彼が提唱した戦略はアルプスに軍隊を結集させ、山岳を天然の要塞（Réduit）とすることでナチス軍と徹底的に戦うというもので、レデュイ・プランと呼ばれている。ギザン将軍はその上で、万一スイスの敗北が明らかになったときにはゴットハルトとシンプロンの二大トンネルを爆破することを予告した。ドイツとイタリアをつなぐ重要なルートを爆破することでスイス占領を無意味にし、スイスへの攻撃が高くつくことを示すのが狙いだった。

デュレンマットの小説においては軍隊ではなく、スイス政府関係者5千人が要塞としてのアルプスに結集する。すなわち、アルプスの地下に建設された巨大核シェルターに政府が議会と官庁を引き連れて避難するのである。全面核戦争となった第三次世界大戦でスイスも核攻撃を受け、アルプスでの戦いはヒマラヤでの戦いに引き継がれていく。戦闘の場となるヒマラヤの地下道は、アルプスに掘られたトンネルを連想させる。

山岳地帯が戦場になっているという意味で、この小説はシラーの『ヴィルヘルム・テル』の延長線上に位置付けられるだろう。つまり、かつてハプスブルク、ナポレオンあるいはヒトラーといった侵略者に対抗し、自国の自由と独立を守るために（軍事的にせよ精神的にせよ）戦ったように、スイス人は再び外

15 Friedrich Dürrenmatt: *Labyrinth. Stoffe I-III*. In: ders.: *Werkausgabe*, Bd. 28, S. 86. 以下、短編小説『チベットの冬戦争』からの引用は本文中に頁数のみ記す。

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

敵と戦っているはずなのだ。ところが、この小説では、語り手が戦っている敵が誰なのかは定かではない。第二次世界大戦で隣国ナチス・ドイツとさえ実戦には至らなかったスイスが戦後、価値を共有する西側諸国に囲まれた環境で、いったい誰と戦うというのだろうか。

『チベットの冬戦争』は2巻からなる晩年の代表作『素材』(Stoffe, 1981, 1990)の第1巻『迷宮——素材 I-III』(Labyrinth. Stoffe I-III)に収められている。デュレンマットは生涯にわたっていくつかの文学的素材にこだわり、それらをもとにした作品を書き続けた。『素材』は、そういった文学的素材の歴史を語ることによって自分の人生を語るという特殊な形をもった自叙伝である。そのため、従来のデュレンマット研究ではこの短編小説は「迷宮」という観点からアプローチされることが多く、「迷宮」のイメージに大きな影響を与えたプラトンの〈洞窟の比喩〉など、哲学的関連での分析が中心となっており、¹⁶ レデュイ・プランとの関係は指摘されながらも、¹⁷ 軍事的・政治的な観点はあまり注目されてこなかった。が、2021年にデュレンマット作品を冷戦という枠組みでとらえたフィッシャーの研究書が出版され、¹⁸ これがスイスの仮想敵国について考える上で非常に示唆に富んだものとなっている。冷戦時代のスイスの軍事政策を念頭において読むと、『チベットの冬戦争』という荒唐無稽に見える物語（特に、チベットでの戦争に移行する以前の、第三次世界大戦に関わる部分）が、実はスイスの現実を反映したものであることがよくわかるからである。本論では、スイスはいったい誰と戦っているのかという素朴な疑問を出発点として、冷戦下のスイスの具体的な防衛政策を参照しながら、デュレン

¹⁶ Vgl. Philipp Burkard: *Dürrenmatts „Stoffe“. Zur literarischen Transformation der Erkenntnistheorien Kants und Vaihingers im Spätwerk*. Tübingen: Francke, 2004. Ulrich Weber: *Forschungsreisen in Platos Höhle oder Spätfolgen einer Seminararbeit*. In: Jürgen Söring, Annette Mingels (Hg.): *Dürrenmatt im Zentrum*. Frankfurt/M.: Peter Lang, 2004, S. 151-175.

¹⁷ Vgl. Weber, ebd., S. 165.

¹⁸ Michael Fischer: *Rauchen in der Pulverfabrik. Friedrich Dürrenmatts politisches Denken im Kalten Krieg*. Zürich: Chronos, 2021.

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

マットがこの作品でスイスのどのような「戦争」を問題にしているのか、またどのような形でアルプス神話を解体しているのかについて考える。

2. 作品の成立史

デュレンマットは1978年に『チベットの冬戦争』の執筆に集中的に取り組んだ。『迷宮——素材 I - III』で彼は、「冬戦争」というアイデアを思いついたのは1944年から45年にかけての冬だったと回想している。当時、大学生だったデュレンマットは、フランス国境に近いジュネーヴ近郊のラ・プラーヌで軍務（補充予備役）に就いていた。

構想することと実現することは別である。凍りついたローヌ川の岸辺で国境の向こうの無人地帯を凝視しながら、私は世界規模の迷宮を構想した。後に私は虚構の「私」という語り手を据えることで、この迷宮を形にしようと何度も試みた。すべての試みは失敗に終わった。1972年に私は最初の構想を3ページほどの文章にし、それから『迷宮のドラマトゥルギー』を書いた。今、1978年現在、私は突然やはり「冬戦争」を完成させたいという野心に襲われて、数週間前からまたこの話にかかりきりになっている […]。¹⁹

1944年当時のデュレンマットにとって、「迷宮」はスイスの比喩だった。²⁰ 1939年に第二次世界大戦が勃発すると、スイスは事実上国境を閉鎖する。大戦中のスイスについての常識的なイメージのひとつは、列強に取り囲まれなが

¹⁹ Friedrich Dürrenmatt: *Labyrinth. Stoffe I-III*. In: ders.: *Werkausgabe*, Bd. 28, S. 84f.

²⁰ 1950年代に書かれた推理小説やエッセイ『演劇の諸問題』（*Theaterprobleme*, 1954）では、迷宮は見通しのきかない世界の比喩となる。また、プロープストとヴェーバーは、『チベットの冬戦争』における迷宮は書く行為の比喩にもなっていると指摘している。Vgl. Rudolf Probst, Ulrich Weber: *Das „Stoffe“-Projekt*. In: Ulrich Weber, Andreas Mauz, Martin Stingelin (Hg.): *Dürrenmatt Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Heidelberg: Metzler, 2020, S. 168.

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

らも中立を守り通した小国スイスが〈自由の砦〉だったというものだろう。しかし、デュレンマットにとってその〈自由の砦〉は同時に、自分から移動の自由を奪う「監獄」でもあった。²¹ 幼い頃からギリシア神話に親しんでいたデュレンマットは、怪物ミノタウロスを幽閉したラビュリントス（迷宮）という名の監獄とスイスを同一視する。彼は次のように回想している。

戦争が始まり、じりじりと近づいてきて、国を取り囲んだ。その結果、逆説的なことにスイスはカタストロフィーを免れることになった。スイスが監獄だったのか、包囲された砦だったのか、ヒトラーのための生産工場だったのかは決めがたい。スイスが手つかずで残ったのは、スイスに勇気があったからなのか、臆病だったからなのか、それともその両方だったからなのかも決めがたい。ひょっとしたらスイスは世界史から忘れられたか、免除されたか、取り残されたか、化石扱いされたか何かだったのかもしれない——そういうこともあり得るのだ。²²

「迷宮」という文学的素材は戦後まもなく、『街』（*Die Stadt*, 1947）と『ある看守の手記から』（*Aus den Papieren eines Wärters*, 1952）というふたつの短編小説となる。これらの作品は前半部分が重複しており、いずれも、得体の知れない「街」²³に敵意を抱く主人公が結局は「街」に取り込まれ、行政当局が提供する看守の職務につく話である。看守の職場である監獄は地下にあり、こ

21 「この国は世界のその他の部分から隔絶されてしまった。私は外国には、それ以前に2度行ったことがあるだけだった。」Friedrich Dürrenmatt: *Labyrinth. Stoffe I-III*. In: ders.: *Werkausgabe*, Bd. 28, S. 63.

22 Ebd., S. 64.

23 「街」のモデルとなったのは、デュレンマットの育ったベルンである。14歳で生まれ故郷の小さな村コノルフィンゲンから首都ベルンに引っ越したとき、アーケードに取り囲まれた細い道が入り組む旧市街を見て、デュレンマット「迷宮が現実のものとなった」（ebd., S. 45）と感じたと回想している。またヴェーバーは、〈洞窟の比喩〉を介して『街』（*Die Stadt*）がプラトンの『国家』（*Der Staat*）とメタテキスト的な関係にあると指摘している。Vgl. Weber, *Forschungsreisen in Platons Höhle oder Spätfolgen einer Seminararbeit*. In: Söring, Mingels (Hg.) : a. a. O., S. 164.

れが迷宮のように入り組んだ構造になっている。この監獄では看守は囚人と同じ服を着ることになっているので、両者は区別できない。これは大戦中に自由であると同時に不自由でもあったスイス人の在り方を表現していると解釈できるだろう。

どちらの作品も、看守が残した手記を図書館の司書補が編纂して読者に伝えるという設定になっている。その手記が断片のままであることは、「迷宮を形にしよう」とするデュレンマットの試みが失敗に終わったことを示している。『ある看守の手記から』では、看守の職に就く「私」は「アルプス戦争」²⁴にも参加した経験のある元兵士で、戦後の平和な世の中に適応できない人物である。「街」で働くよう勧められても頑なに拒む「私」に対して、「街」の役人はチベットで戦争が継続していることを告げる。1970年代に入って「冬戦争」という素材に再び取り組もうとしたとき、デュレンマットはこの部分をふくらませた。このとき書いたメモには、次のような概略が書かれている。

この戦争は、平和が支配する世界で、冒険好きな者や犯罪者たちが「チベットの冬戦争」に参加することを志願できるというものである。この戦争はヒマラヤで行われており、終わることがなく、そもそも誰と戦っているのか、誰も知らない。途方もなく高い場所に掘られた塹壕や掩体壕から成る迷宮で、兵士たちはみな同じ白い雪上用の制服を着て戦う。残虐で、見通しのつかない戦争である。出撃していないとき、兵士たちは氷の穴の中に隠れて過ごす。彼らは自ら志願して兵士になったということをとっくの昔に忘れてしまい、なぜ自分たちが戦争をしているのか、この冬戦争の意味を探し始める。なぜこの戦争が必要なのか、現実離れた思想を展開し、いくつもの党派を作って、もともとは敵だと思い込んでいた者の方へ寝返ったりする。残虐な

²⁴ Friedrich Dürrenmatt: *Aus den Papieren eines Wärters*. In: ders.: *Werkausgabe*, Bd. 19, S. 168.

戦闘のあいだ、すべての者がグループに分かれ、常にそれを作り変える。²⁵

完成した小説『チベットの冬戦争』では、スイス人傭兵の「私」がヒマラヤに掘られた地下道の壁に刻み込んだ記録を、歴史家らしい研究者が伝えるという設定になっている。²⁶「私」は人類が滅亡することを想定して記録を残そうとしており、その記録を読むのは地球外知的生命体だろうと予想する。「彼らは私が刻み込んだこの文章から我々の知識のレベルを知り、我々が原子爆弾と水素爆弾を所有して、第三次世界大戦に至らざるを得なかったことを知るだろう。」(110) 核兵器によって生命の絶えた星として、太陽の周りを無意味に回り続ける地球は、デュレンマットが繰り返し描いた未来像である。²⁷ だが、この小説では人類は滅亡を免れ、後世の研究者が「私」の記録を読む。研究者たちはこの記録の信憑性を疑ってはいるものの、第三次世界大戦が勃発したこと、それが全面核戦争だったことは事実と認めている。記録の最後に加えられた、オーストラリア人とおぼしき研究者のコメントは次のようなものである。「これらすべてに加えて、滅亡したヨーロッパについて私たちは具体的には何も知らないということを言うておかなければならない。ヨーロッパのものとしては音楽だけが残された。」(161)

²⁵ 引用にあたっては Burkard, a. a. O., S. 122 に図版として収録されているデュレンマットの草稿 SLA-FD-A-a42IXL, S. 4a を参照した。

²⁶ ただし、壁に文字を刻んだのは必ずしも「私」ひとりだけではなく、複数の語り手がいる可能性が示唆されている。「私」には「FD 256323」(89) という番号が付けられているが、FD はデュレンマットのイニシャルであり、特に晩年の作品には作者の分身がFD としてしばしば登場する。現実のデュレンマットと同様に、「私」もベルン大学哲学科の学生だったときに戦争が始まっており、「私」が壁に文章を刻み込む姿は、『チベットの冬戦争』を創作している作者自身の姿と重なり合う。また、壁にはすでに文章を刻んだ上にさらに別の文章が刻まれていることがあり、判読不可能な部分が多くある。パランプセストのようなこの記録は、『街』、『ある看守の手記から』、『チベットの冬戦争』の3作品の重なりを連想させる。

²⁷ Vgl. Friedrich Dürrenmatt: *Die Physiker. Eine Komödie in zwei Akten*. In: ders.: *Werkausgabe*, Bd. 7, S. 87.

3. 第二次世界大戦から冷戦の時代へ

(1) 外部の敵

スイスは1815年のウィーン会議で永世中立国として国際的に承認されて以来、現在に至るまでその立場を守っている。だが、永世中立国だからと言って戦禍を免れる保証はないことは、第二次世界大戦中のベルギーの例を見れば明らかである。当然ながらスイスもナチス・ドイツの侵攻に備えていた。すでに述べたように、スイスが選択した軍事戦略は、アルプスを要塞として徹底抗戦するというものだった。スイス軍が実際にナチス軍と戦うことはなかったが、戦後、スイスがヒトラーの侵略を免れたのはギザン将軍と彼が率いた強いスイス軍のおかげであるという神話が誕生し、ギザン将軍は国民的英雄となった。²⁸

第二次世界大戦中、スイスが警戒していたものももうひとつ存在する。それは共産主義である。1933年に隣国ドイツでナチスが政権を掌握して以降、スイスでは外からの脅威に対して〈スイスのなもの〉を文化的なレベルで守る精神的国土防衛運動が展開された。この運動をめぐるのはさまざまに議論され、何が〈スイスの〉なのかは論者によって意見が分かれるが、共通するのはナチズムと共産主義の排除という点である。²⁹

²⁸ デュレンマットに言わせると、ヒトラーがスイスを併合しなかったのは強いスイス軍を恐れたからではなく、「スイスは征服するよりも、中立国のままにしておいた方が役に立ったから」だった。Friedrich Dürrenmatt: *Der schwierige Nachbar*. In: ders.: *Meine Schweiz. Ein Lesebuch*. Hg. von Heinz Ludwig Arnold, Anna von Planta und Ulrich Weber, Zürich: Diogenes, 1998, S. 159. ここではのめかされているのは、軍需物資の売買や金取引のような、スイスとナチス・ドイツとの経済的な関係だと考えられる。小国が生き延びるために必要な方策だったとはいえ、戦後それに無反省な態度を取り続けた点をデュレンマットはさまざまな作品の中で厳しく批判した。また、『チベットの冬戦争』には、「第三次世界大戦が始まって最初の2日間は従来型の戦争だった。我々の軍隊にとっては1512年以来初めての戦いだった」(119)という一節がある。1512年の戦いとは、イタリア戦争でローマ教皇庁側についた盟約者団がフランス軍からミラノ公国を奪回したことを指している。つまり、それ以来実戦に臨んでいないスイス軍がナチスに恐れられるほど強かったかどうか、疑問が残るというわけである。

²⁹ 葉柳和則「チューリヒ劇場と社会・文化的文脈」、葉柳和則編『ナチスと闘った劇場——精神的国土防衛とチューリヒ劇場の〈伝説〉』、春風社、2021年、24頁参照。

小説『チベットの冬戦争』では、第三次世界大戦後も継続している戦いが「冬戦争」と呼ばれるのは、戦闘が行われている土地がいつも冬だからと説明されている。しかし、小説が構想された1940年代半ばの時点で「冬戦争」と言えば、現実に起きたばかりの戦争を連想する方が自然だっただろう。すなわち、1939年11月30日にソ連がフィンランドに侵攻した冬戦争である（1940年3月13日に終結）。フィンランドはこの侵略に抵抗し、独立を守った。³⁰ したがって、『チベットの冬戦争』というタイトルには対ソ連戦が含意されていると考えても外的外れではないだろう。

小説の中でも、第三次世界大戦の最初の2日間、スイスはソ連と戦っている。このとき連絡将校だった「私」は、「ロシア軍が北イタリアに侵攻している間、我々はロシア軍をランデックで阻止していた」（119）と回想している。だが、3日目からは大量の核兵器が使用され、「同盟国の軍も敵の軍もどちらも降伏した」（119）という不確かなニュースが「私」の耳に入る。参戦国の軍隊はみな戦うことが不可能な状態になり、戦争は勝ち負けに関係なく自然消滅的に終結したらしいのだ。このニュースが届いたとき、スイス南東部エンガディンに滞在中の司令官のもといた「私」は、ある秘密の任務を遂行するために、そこから故郷のベルンまでスイスを横断するように移動し、スイス全土の悲惨な状態をつぶさに見る。戦争前には百億人だった地球の人口は1億人足らずにまで激減していた。

冷戦時代、スイス人が何よりも恐れたのはソ連の核攻撃だった。キューバ危機の翌年にあたる1963年には、連邦法により新たな家屋の建設に際して核シェルターの設置が義務づけられた（2006年まで）。「核戦争の脅威によっ

30 フィンランドはその後、ソ連を相手に再び継続戦争を戦うことになった（1941年6月25日－1944年9月19日）。その際、ソ連に対抗するためにナチス・ドイツと微妙な関係をもつことを余儀なくされたフィンランドの立場も、スイス人にはよく理解できるものだっただろう。冬戦争と継続戦争におけるフィンランド軍最高司令官で、後に大統領となるマンネルヘイム（Carl Gustaf Emil Mannerheim, 1867-1951）は晩年をスイスで過ごしている。

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

て、スイス人は生き延びるには地下しかないと考えるようになった」³¹とフィッシャーは指摘している。現在、スイスには国民全員を収容するのに十分な数の核シェルターがある。それは、スイスの地下に地上のスイスの「奇妙なダブリング」³²としてもうひとつの国があることを意味する。

1970年代のスイスの核シェルター熱をよく表しているのは、世界最大の防衛施設として知られたゾンネンベルク・トンネルだろう。ルツェルン近郊を走る高速道路にあるこのトンネルは、非常時には核シェルターとして2万人を2週間収容できるようになっていた。トンネルの中央部分には7階建ての建物の構造をもった洞窟が掘られて司令部が置かれ、ラジオ局、手術・入院設備のある病院、警察や拘置所まで完備されていた。維持に膨大な費用がかかるという理由で2002年には解体・縮小が決定し、2006年から2008年にかけて行われた工事により2万人収容施設は解体されて、ゾンネンベルク・トンネルは道路交通のみに使用されるようになった。司令部のあった洞窟は現在では2000人収容の防衛施設となっており、見学が可能である。³³

ゾンネンベルク・トンネルの核シェルターが完成したのが1976年だったことを考えると、1978年にデュレンマットが書いた、ベルン高地の地下に掘られた巨大シェルターにスイス政府が議会と官庁ごと引っ越す話にはかなりのリアリティがあることがわかる。『チベットの冬戦争』では、地下世界は地上世界のコピーとして存在し、次のように描写されている。

第三次世界大戦が勃発する前にすでに、政府と官庁とふたつの議会はブリュムリスアルプの地下に掘られた巨大な防衛施設に退避していた。いかなる攻撃からも守られる立法府と行政府が、国土防衛の前提条件だと思われたから

31 Fischer, a. a. O., S. 186.

32 Ebd., S. 187.

33 この施設のホームページのタイトルが「地下で生き延びる」なのが象徴的である。<https://unterirdisch-ueberleben.ch/archiv/> (Stand: 15. 9. 2022) スイスではこのような設備の建設を決めるのは住民投票で、計画が持ち上がった1969年にルツェルン市の有権者の53.8%が建設に賛成した。

だ。首都にある連邦院は、その建物の下にある秘密施設や無線設備も含めて、ブリュムリスアルプの地下にそっくりそのまま再現された。市立劇場の美術担当者が写真を拡大したり、スポットライトを当てたりして、そこから見える景色まで同じにした。ブリュムリスアルプの中にある連邦院の周囲には住居や映画館や礼拝堂、バー、九柱戯場、病院、フィットネス・センターが建てられた。さらにその周りには、3つの「リング」があった。食料品やワインセラー（特にヴォー州産）のある供給リング、内側の防衛リング、外側の防衛リングである。この巨大な施設の下には、世界の半分の金塊を蓄えた金庫があり、その下には原子力発電所があった。（116-117）

ここで描かれているのは、巨大核シェルターとしてのアルプスである。アルプスが国（政府）を守る要塞であるという意味では、第二のレデュイ・プランと呼んでもいいかもしれない。

ベルンに到着した「私」は半壊した（地上の）連邦院に立ち寄る。「国民議会の議場は驚くほど被害を受けていなかった。あの厭わしい巨大フレスコ画さえ残っていた。」（130）現実の国民議会の議場に掛けられている「盟約者団の揺籃（Die Wiege der Eidgenossenschaft）」というタイトルのフレスコ画は、建国の地リュトリ付近のパノラマを描いたものである。ここでも問題になっているのはリュトリに代表されるアルプスの風景で、核攻撃の後でもそれが無傷で残っているというのは、デュレンマット特有の皮肉だろう。

「私」が地下のコンピュータ室に着くと、突然大音量で無線放送が流れてくる。それはブリュムリスアルプのシェルターにいるスイス軍局長（国防大臣にあたる）の国民向けメッセージだった。彼は、シェルターは無事だが、強い放射線の影響で外界からの情報がまったく入らなくなっていると言う。長いスピーチは次のような言葉で結ばれる。

もし仮にこの国がもはや抵抗できない状態にあるとしても、あるいは——こ

れも残念ながら考えられることですが——この国がまったく存在なくなっているとしても、この国の無傷の政府、国民に選ばれた議会とその完璧な官庁は存在しているのです。政府と議会と官庁は絶対に降伏しません。それどころか、我々は世界平和のために、永世武装中立国としての独立を改めて宣言する準備ができています。(136)

「私」とともにこの放送を聞いた女性ノラは、「国民のいない無傷の政府って、政府にとっては理想的ね」(136)と言って笑い転げる。この小説においてレデュイ・プランが最もグロテスクにパロディ化されている箇所だろう。ギザン将軍にとってはアルプスを守ることこそが国家を守ることであり、彼の作戦は大多数の人々の暮らす都市部の防衛を断念するものだった。³⁴ デュレンマットの作品においては、アルプスの地下核シェルターに籠っている政府・議会・官庁の関係者約5千人のみが守られ、その他の国民のほとんどは死んで、地上のスイスは潰滅する。リュトリを描いたフレスコ画がほぼ無傷で残っている場面に象徴的に表されているように、国が消滅しようと国民が全滅しようと、何があってもアルプスだけは残るのである。

この文脈で興味深いのは、核戦争の後、シュピーリの『ハイジ』だけが焚書を免れることである。地上のスイスで生き残ったごくわずかな人々は、「第三次世界大戦をすべての科学技術と教育のせいにして」(122)、怒りのあまり原発もダムも化学工場も博物館も図書館も、何もかも破壊する。その光景に、「私」は「まるでひとつの国全体が自殺したようだ」(123)と感じる。人々は戦火を免れたわずかな書物を焚書にするのだが、唯一例外とされるのが『ハイジ』なのである。スイス政府がブリュムリスアルプの地下核シェルターに避難して以来、政府に見捨てられたと感じた一般国民は、政府に不信感を抱くようになっていたにもかかわらず、人々はやはり、自分たちの故郷としてのアルプスとい

³⁴ 新本、前掲論文、206頁参照。

う神話から逃れられない。³⁵

(2) 内部の敵

この小説において、ソ連という外敵よりはるかに存在感があるのは、実は内なる敵である。第三次世界大戦が始まる前、国是とは「異なる考え方をする者は、反社会的あるいは精神障害とみなされるか、売国奴のように扱われた」(112)。それは具体的には「原発に反対する人々、兵役拒否者、牧師」(118)のような反体制派や平和主義者で、彼らがスイスの核兵器保有に反対し、そのせいで核兵器製造がリヒテンシュタインにすら遅れをとる。現実のリヒテンシュタインはスイスが利益代表を務める小国で、独自の通貨を持たずにスイス・フランを使い、スイス軍を頼って自前の軍隊も持たない国なので、その国に核兵器開発で後れをとるという小説の設定は、スイスにとってはあり得ない屈辱的な事態である。ちなみに、現実のスイスは広島と長崎に原爆が投下された直後から核保有を検討し、1946年には核兵器開発のために「核エネルギー研究委員会」を政府に設置した。1977年に核拡散防止条約を批准したが、この委員会が最終的に解散したのは1988年だった。³⁶ この小説で、スイス政府関係者が避難した核シェルターの真下に原子力発電所があるというナンセンスな状況も、スイス政府が原発推進の立場だったことを表していると考えられる。

内なる敵として特にクローズアップされているのは兵役拒否者である。政府に忠実なスイス軍兵士であることをやめようとせず、いつまでも戦い続けようとする「私」とは対照的な人物として、兵役拒否者エディンガー（ノラの夫）が登場する。彼は兵役を拒否したために死刑判決を受けたが、恩赦により終身

³⁵ 「ハイジの物語は疑いもなくスイスの国民神話だ。この物語はスイス文化に固有のものとしてされる価値観を伝えているし、この物語を読めばスイス人はそこに自分自身の姿を見出すからだ。」ジャン＝ミシェル・ヴィスメール『ハイジ神話——世界を征服した「アルプスの少女」』川島隆訳、晃洋書房、2015年、5頁。

³⁶ 福原直樹『黒いスイス』新潮社、2004年、78-97頁参照。デュレンマットはスイスの核兵器開発に反対の立場だった。Vgl. Peter Rüedi: *Dürrenmatt oder Die Ahnung vom Ganzen*. Zürich: Diogenes, 2011, S. 402.

刑になっていた。死刑あるいは終身刑というのは、もちろんデュレンマットらしい誇張だが、国民皆兵を国是とするスイスでは実際に周辺諸国とは比べものにならないほど厳しい罰が兵役拒否者に与えられていた。「スイスが軍隊を持つのではない。スイスが軍隊なのだ」³⁷とまで言われる国で、良心的兵役拒否が認められ、代替として社会奉仕活動ができるようになったのは1996年のことである。それ以前は、兵役拒否者は数か月から1年余りの懲役刑に処せられていた。このような厳しい刑罰にもかかわらず、1968年の学生運動以降、兵役拒否者の数は大きく増加していた。³⁸

小説では全面核戦争の後、本部をネパールに置く平和主義的な世界行政府が誕生する。そのスイス支部のリーダーがエディンガーであり、「私」の極秘任務はエディンガーを殺害することだった。エディンガーを射殺した後、「私」は「自分にはもはや敵がいなくなってしまった」(149)ことに気づく。この後「私」はチベットの冬戦争に参加する。誰と戦っているのかは定かでない冬戦争だが、戦っているからには敵が存在しているに違いない、と「私」は考える。「傭兵にとって敵が誰なのかはどうでもいいことで、大切なのは何のために戦い、誰が命令しているのかということだ。」(95)つまり、「私」は兵士としてのアイデンティティを捨てられず、チベットの冬戦争に参加することを決意したのだ。この冬戦争は結局のところ、戦いたい兵士たちのための戦争であって、何か大義名分があるわけでも、実質的な敵・味方が存在するわけでもない、無意味な戦いなのである。

37 1989年にスイスで軍隊廃止の是非を問う国民投票が行われたが、その前年に連邦政府が発表した、軍隊廃止を求める国民発議に反対するメッセージがこの文から始まっている。当然のことながら、兵役を拒否する動きと軍隊廃止を求める動きは連動している。Vgl. „Die Schweiz ist eine Armee.“ In: *Neue Zürcher Zeitung* am 31. 10. 2010. https://www.nzz.ch/die_schweiz_ist_eine_armee-ld.994022 (Stand: 15. 9. 2022)

38 デュレンマットの息子のペーターも牧師で兵役拒否者であり、1973年に裁判にかけられている。Vgl. Rüedi, a. a. O., S. 402. デュレンマット自身は1940年に徴兵検査を受けて合格したが、スポーツが極端に苦手で不器用だったので、初年兵学校での訓練は苦痛以外の何ものでもなかった。Vgl. Friedrich Dürrenmatt: *Labyrinth. Stoffe I-III*. In: ders.: *Werkausgabe*, Bd. 28, S. 61-63.

4. 結論

デュレンマットが第二次世界大戦中に構想し、1970年代後半に完成させたディストピア小説『チベットの冬戦争』は、冷戦時代のスイスに蔓延していた、ソ連の核攻撃に対する恐怖心と兵役拒否者に対する嫌悪感を、皮肉を込めて描いている。この小説においてアルプスは、地下に巨大核シェルターを擁する場所である。第三次世界大戦が勃発し、あらかじめ地下核シェルターに退避していた政府関係者だけが無事で、国民はほぼ全滅する。スイス人の故郷としての美しいアルプス、空高くそびえる山々は、この小説では反転して地下深くに広がる要塞となり、国民を見捨てた政府の隠れ家として描かれている。

物語の語り手である「私」は政府に忠実なスイス兵として第三次世界大戦を戦い、反体制派のリーダー格だった兵役拒否者エディンガーを射殺する。エディンガーの妻ノラは「私」に、いい加減に目を覚ませと言う。

政府と議会と官庁は永遠にブリュムリسالプに留まることになるのよ！
[…] どんな愛国主義もばかばかしいものだということがまだわからないの？ この政府はいったいなんのためにまだ存在しているの？ それに、あれがブリュムリسالプにいる唯一の政府だとでも思っているの？ 世界中の政府がそれぞれのシェルターに閉じ込められている、とエディンガーは言っていたわ。我が国と同じような政府が、国民も敵もない政府が。(149)

にもかかわらず、チベットで続けられている戦闘に参加し、敵が誰かを問うことなく戦い続ける「私」は、スイス軍を体現していると解釈できるだろう。つまり、スイス軍が存在する限り、スイスには戦うべき相手が存在しなければならないのだ。現実のスイスにとって、第二次世界大戦の時代に戦うべき相手はナチス・ドイツであり、冷戦時代はソ連だった。スイス政府が兵役拒否者に非常に厳しい態度で接したのは、彼らがスイス軍の存在意義を否定する存在だっ

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

たからだ。軍隊廃止を求める国民発議に反対して政府は「スイスが軍隊を持つのではない。スイスが軍隊なのだ」と主張したが、このようなメッセージを発する国では、軍隊を拒否することは国を拒否することに他ならない。ハプスブルクという外敵があつてはじめて盟約者団が結成されたように、小国家の集合体としてのスイスが解体しないためには、常に外からの脅威が、そしてその脅威と戦う軍隊が必要なのである。

『チベットの冬戦争』が出版された数年後に冷戦が終結し、1991年にはソ連も崩壊して、世界中の人々が核戦争の恐怖から解放された。それから約30年間、この小説は冷戦時代にソ連の侵攻に対してヒステリックになっていたスイスのカリカチュアのように見えた。冷戦が終わってみると、たとえばゾンネンベルク・トンネルの建設当時、人々が核攻撃の後わずか2週間だけ生き延びることにどんな意味を見出していたのか、首をかしげたくなる。また、国民全員を収容する核シェルターにたとえ2週間以上生活できる貯えがあるとしても、放射線に汚染された地球にスイス人だけが取り残され、しかも永久に地中での生活を強いられるとすれば、それはやはりナンセンスだと思われたのである。

ところが、2022年2月にロシアがウクライナに侵攻し、核兵器使用を示唆し始めると、この小説は作者がおそらくは意図していなかっただろう現実味を帯びるようになってしまった。ロシアによる侵略と核攻撃はスイス人の単なる妄想ではなく、ヨーロッパのすべての国にとって現実に起こり得る事態となったからである。そのためヨーロッパ諸国は軍備縮小に向かっていた政策を転換させ、国防に再び力を入れざるを得なくなった。

このような状況で注目が集まったのはフィンランドだった。ロシアと約1300キロにも渡って国境を接し、「冬戦争」の経験もあるフィンランドは、冷戦終結後にドイツなど北大西洋条約機構（NATO）加盟国の大半が徴兵制を廃止（もしくは中止）するなかで徴兵制を維持し続け、高い国防意識を保持していたからである。そのフィンランドとともにスウェーデンが伝統ある中立政策を捨ててNATOへの加盟を決めたことは（2022年7月にNATO加盟国すべて

地下にあるもうひとつのスイス——デュレンマットの短編小説『チベットの冬戦争』におけるアルプスの表象——

が両国の加盟議定書に署名した)、現代社会において中立国が自国の軍事力だけで防衛することがいかに困難かを浮き彫りにした。ちなみにスイスは2022年9月の時点で、NATOやヨーロッパ連合との関係を強化しつつも、中立政策は維持することを表明している。一時は盛り上がっていたスイス軍廃止の議論も、現在の状況ではあり得ないものとなっている。ロシアによるウクライナ侵攻によって国際情勢がこれほど変わってしまったことは、『チベットの冬戦争』を一種のブラックジョークとして書いたデュレンマットにとっては、まさに「起こり得る最悪の方向転換」³⁹に違いない。

39 デュレンマットの喜劇に特有の仕掛けで、観客は最初のうちはおなじみの悲劇だと思いつながら芝居を見ているが、突然そうではないものとして体験される転換点が訪れる(これが「起こり得る最悪の方向転換」と呼ばれる)、主人公は古典的な英雄になり損ねる。